

Vol.
24

Shumei International

NEWSLETTER



Shumei International is dedicated to improving the human community by restoring the environment, fostering a deep appreciation of beauty and the arts and cultivating leadership among the next generation.

The organization was founded on the philosophy of Mokichi Okada, who taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will uplift human society and enable a truly balanced and sustainable world.

Shumei International has established programs around the world with a focus on Natural Agriculture.

Shumei International

NEWSLETTER

Vol.24



【表紙】

ザンビア ベンバ地区の学校の子どもたち



秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たち同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力し合い、世界平和に貢献していくことを目指しています。

Special Topics

- 3 2026 オックスフォード・リアル・ファーミング・カンファレンス (ORFC)
美しい心と祈りが大地に届く ― 農業と芸術を通じた精神性の実践
- 4 ORFC セッション 「土に携わる人々の視点 ― 人と地球を癒やす道筋」
- 10 <イベント>Listening to the Land Day ― 大地の声を聴く日
- 12 サティシュ・クマール氏講演
- 15 ザンビア自然農法ショー 20th Anniversary
 - 17 ザンビアプロジェクト20周年を迎えて
秀明インターナショナル 開発途上国支援担当理事 アラン・今井
 - 20 青年の感想
 - 21 今後のザンビアプロジェクトに向けて
NADPZ(ザンビア自然農法開発計画)代表 バーバラ・ハチブカ・バンダ
- 22 タンザニア さくら女子中学校 自然農法プロジェクト
秀明自然農法ネットワーク 酒井賢治



オックスフォード市庁舎で行われたオープニングセレモニーの様子

2026 ORFC (オックスフォード・リアル・ファーマーリング・カンファレンス)



美しい心と祈りが大地に届く —— 農業と芸術を通じた精神性の実践

2026年1月8日、9日の2日間、イギリス・オックスフォードにて第17回オックスフォード・リアル・ファーマーリング・カンファレンス（以下ORFC）が開催されました。会場とオンラインを合わせて約3300名が参加し、自然と調和した農業と食に関する話し合いが行われました。

前日の1月7日には、プレイベントとして第2回リスニング・ツアー・ザ・ランド・デイ（以下LTTL）が開催されました。日本語で「大地の声を聴く日」と訳されるこのイベントは、農業の枠を超え、人と自然の精神的なつながりを見つめ直す新たな試みです。本年は参加者が去年の100人から350人へと大きく増え、農や食に携わる人々の間で精神性への関心が高まっていることが感じられました。

両イベントのオープニングの締めくくりは、秀明太鼓の演奏でした。地球の鼓動のように力強い音が会場を満ち、感謝と祈りのエネルギーが参加者の心に深く響きました。

秀明インターナショナル（以下Shumei）は、本年度で8回目のORFC参加となり、会議セッション「土に携わる人々

の視点一人と地球を癒やす道筋」の開催、秀明太鼓によるオープニング演奏、活動紹介ブースの出展を行いました。LTTLでは太鼓演奏とワークショップを実施し、3日間を通して、秀明自然農法を中心に、美や自然との調和、精神性を基盤とした生き方を発信しました。



ORFCオープニングでの演奏

Hugh Warwick撮影



ORFCセッション

土に携わる人々の視点——人と地球を癒やす道筋

1月9日 Shumei は「土に携わる人々の視点——人と地球を癒やす道筋」と題し、セッションを行いました。『すべては自然が教えている』という岡田茂吉師の理念に共感し、実際に土に携わる仕事をしている方々が世界各地から集まり、「土との関わりから生まれる大地とのスピリチュアルなつながりを深めることが、地球や人々を癒やすことにどうつながっていくのか」について話し合われました。自然農法という精神性の実践を通して、大地とのつながりが深まり、土だけでなく心も、コミュニティも豊かになっていく様子を多くのパネリストが一人ひとりの体験から発表を行いました。

登壇者

特別ゲスト

サティシュ・クマール

(思想家、シューマッハ・カレッジ共同創業者、「Resurgence」編集長)

講演者

パトリック・ホールデン

(サステナブル・フード・トラスト代表、英国有機酪農家)

今橋 伸也

(秀明自然農法実施者)

ロッド・カルダー・ポッツ

(アイルランド秀明自然農法リング農家)

アリス・カニングハム

(秀明インターナショナル 国連担当理事)

バーバラ・ハチプカ・バンダ

(ザンビア自然農法開発計画代表)

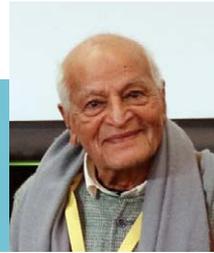
司会

ベン・ラスキン

(英国土壌協会 アグロフォレストリー部長)

特別ゲスト

サティシュ・クマール



サティシュ・クマール

イギリスの思想家。
9歳で出家しジャイナ教の修行僧となる。18歳のとき還俗。マハトマ・ガンディーの非暴力と自立の思想に共鳴し、核大国の首脳に核兵器の放棄を説く1万4千キロの平和巡礼を行う。イギリス南西部にスモーク・スクールとシューマッハ・カレッジを創設。
「リサーチェンス&エコロジカル」誌 名誉編集長

秀明自然農法は『真・善・美』を兼ね備えた農法

私は、つい先日 Shumei を訪れたことをきっかけに、このセッションに参加しています。日本の美しい都市・京都で1週間を過ごした後、そこからほど近い場所にある Shumei の活動の中心となる場所を訪れました。そこには、山々、森、川といった豊かな自然があり、美しい建築、おいしい食事、そして何よりも美しい人々がいました。人々はとても謙虚で、親切で、思いやりにあふれ、理想を実行に移していました。Shumei の創設者である岡田茂吉師のメッセージは、私がこれまで出会ってきた中でも、最も美しいメッセージの一つです。その教えは、農業を含めた生き方に『真・善・美』という三つの大切な要素をもたらしています。しかし現代の農業は、これら三つの要素を失いつつあります。食べ物の質よりも、収益や生産性ばかりを重視し、人間と大地とのつながりを軽視してしまっています。

ラテン語で「土」を意味する humus という言葉は、「人間 (human)」や「謙虚さ (humility)」という言葉の語源でもあります。私たちの身体は、土に育まれた食べ物によって形づくられ、やがて土に還る生き物なのです。ところが私たちは、それを忘れ、土とのつながりを失ってしまったのです。

農業は「真・善・美」の三つの要素が最も大切です。私は、社会にはもっと「土を耕す人」が必要だと思っています。それこそが、私たちが直面している問題を解決し、健康で喜びに満ちた生き方へ向かう道だからです。だからこそ私は、Shumei の活動と、「真・善・美」のメッセージが、世界中に広まっていくことを心から願っています。もし機会があれば、ぜひ日本を訪れてください。そして Shumei を訪れれば、きっと楽しんでいただけるでしょう。

講演者

パトリック・ホールデン



パトリック・ホールデン

英国有機酪農家。
英国の有機農業と市場開拓の先駆者として、オーガニック認証基準策定に関わり、英国土壌協会ディレクターを務めた(1995-2010年)。
現在はサステナブル・フード・トラスト設立、CEO、持続可能な農業を主流にするための政策提言やキャンペーンを行っている。

農業と内なる探究

私の家系は宣教師の家族でした。姉と私は幼い頃、教会で祖父が信仰告白を唱える声をよく聞いていました。そうした環境の中で育った精神性が、私の土台になっています。子どもの頃はロンドンで暮らしていました。休暇のときに農場を訪れた経験が、私の一部となり、自然に強く影響されました。1960年代の音楽や意識変革の流れ⁽¹⁾にも影響を受け、1973年にウェールズ西部へ移住し、共同農場を設立しました。その準備段階で、バイオダイナミック農法⁽²⁾の基礎コースを修了し、酪農場でも働きました。

こうした経験が重なり合い、私の中に一つの問いが生ま

れました。「自分は何者なのか」、自分と大地とのつながりを理解したいと思いました。その探究が、私の人生で最も大切なことだと感じます。目に見える一政策や金融の世界、農業という肉体的に厳しい仕事と、そして目には見えない

(1) 1960年代カウンターカルチャー：平和や自然との調和を目指すリベラルな生き方を志したアメリカの若者たちが作り上げたムーヴメントで、音楽やその後の環境・社会運動に大きな影響を与えた。

(2) バイオダイナミック農法：1920年代にルドルフ・シュタイナーによって考案された。農業や化学肥料を使用せず、自然の生態系やリズムを考慮した栽培を行う。

一精神性に根ざした内なる探究。その二つを結びつけることが、私の人生における最も大切なテーマです。

私は現在、サステナブル・フード・トラストで活動しながら、今も農業に深く携わっています。私たちの農場は約300エーカーの広さがあり、90頭の乳牛を飼育しています。ウェールズで最も歴史ある有機酪農場の一つで、50年以上、化学肥料や殺虫剤を一切使用していません。この農場では、オーガニック農業の基準が整う以前から有機農業に取り組んできました。ベン・ラスキンと私は、英国のオーガニック認証基準の策定にも関わりました。

そしてこの農場で、私たちと共にこの土地の自然が成長し続けていることを実感しています。長年にわたって酪農が続けられてきたこの土地は、そこで働く人々にも良い影響を与えています。ここで育てられる食べ物は健康で栄養に富み、農場全体のエネルギーや精神性も非常に豊かだと感じています。これは50年以上にわたり、農場を美しく調和のとれた場所へと変えようとしてきた努力の証しだと感じています。

一昨年、私は「ビーコン・ファームズ（灯台となる農場）」というネットワークを立ち上げました。有機農場を実際に訪れることで、食べ物の背後にあるストーリーを深く理解してもらうことを目的としています。できるだけ多くの子どもと大人に農場を体験してもらい、その記憶が一生残ることを願っています。私自身、5歳のときに母と酪農場を訪れ、「牛舎の匂いや雰囲気が好きだ。いつか自分もこんな仕事をしたい」と思いました。その体験が、私を農業の道へと導い

てくれました。

実践的な農業と内なる探究をつなぐことが重要だと感じています。28歳のとき、ピーター・シガーに勧められて0.5エーカーの土地でニンジン育てましたが、当時は販売先がありませんでした。ちょうどその頃、私はスピリチュアリティへの関心から、ロンドンでの瞑想会などに参加していました。そのつながりを通じて、ロンドンのベジタリアンレストランや自然食品店でニンジンを扱ってもらえるようになり、毎週通うようになりました。自然食品店には、ジョン・バトラーが育てた美しいニンジンも並んでいました。後に彼が農家から僧侶へと転身していたことを知り、農業と内なる探究、そして生計を両立させていたその姿に、深く共感しました。この出来事は、私の人生の現在地を象徴しています。経済的・物理的な活動だけでなく、精神性に基づく内なる探究こそが、私にとって最も大切なものなのです。

最後に、精神性と農業のつながりについて触れたいと思います。

秀明自然農法の創始者は岡田茂吉師です。この方は、バイオダイナミック農法を生み出したルドルフ・シュタイナーと同様に、精神性を農業の実践として示しました。またサティシュは、元ジャイナ教の僧侶として平和巡礼を行い、学校の設立や雑誌の編集など、多様な活動を続けてきました。彼の行動は全て、精神性の実践そのものです。サティシュが私たちに呼びかけているのは、精神性を基盤とした行動を起こすことです。それがこの話し合いのテーマだと感じています。

講演者

ロッド・カルダー・ポッツ



ロッド・カルダー・ポッツ

アイルランドの秀明自然農法リンゴ生産者。
2018年に、20エーカー（約8町）の果樹園に広がる約8000本のリンゴの木を全て有機農法から秀明自然農法に転換。
2022年にファームিং・フォー・ネイチャーのアンバサダーに任命され、積極的に自然に順応した農法の教育・普及に取り組んでいる。

自然の力と祈りで大地を癒やす

私は南アフリカで生まれました。南アフリカの生活は苦労の連続でした。父の一族は、数百年にわたって農業を営んできました。アパルトヘイト政策が始まったことをきっかけに、両親は母の祖国アイルランドへ戻ることを決断しました。

当時、多くの農場はまだ有機的な方法で農業を行っていました。父と母は農場を手に入れ、アイルランドで初めてホップを栽培し、集約農業によるリンゴ栽培にも取り組みました。

1969年に最初のリンゴを植えて以降、農場は成功を収め、土壌は豊かで、化学肥料もよく効き、利益を上げることは容易でした。

1970年代の終わり、私たち4人の兄弟を育て上げた両親は、リンゴ事業を私に譲ってくれました。しかし同時に、自分たちがこの土地を傷つけてしまったことにも気づいていました。果実の品質や収量が悪化することは明らかで、続けることはできないと感じていました。しかし、土地を元に



戻す方法は分かりませんでした。湿潤なアイルランドの恵まれた気候にありながら、私たちの土地は荒地のようになっていたのです。自然農法の根本にあるのは、自然、生態系との調和、そして土の中の微生物です。

私は1986年に結婚し、その年に化学肥料の使用をやめました。農家から動物の糞をもらい農場に撒きましたが、リンゴはほとんど病気になり、1986年と87年の真夏、農場はまるで冬のような景色でした。私たちは32000本全てのリンゴの木を抜き、植え替えましたが、土の微生物はすぐには戻らず、厳しい状態が続きました。

30年以上が経ち、土の微生物はようやく回復し、良くな



ロッドさんの圃場に二重の虹が懸かる

りつつあります。そんなとき、Shumeiの山添さんと今橋さんが果樹園を訪れ、「自然農法を一緒にやってみませんか」と声をかけてくれました。それ以来、彼らは年に数回果樹園を訪れ、祈りを捧げ、私を励ましてくれました。私は、自然やリンゴの木を信頼し、祈りを捧げるという、自分に欠けていた大切な姿勢を思い出しました。Shumeiの支えによって、忘れていた精神性と自然の力とのつながりを取り戻し、祈りはリンゴの木に伝わりました。翌年には、全てのリンゴの木を有機農法から秀明自然農法へと転換することができました。

現在、農場は安定し、20エーカーの土地で年間200～300トンのリンゴを生産し、7～8人の従業員を雇用しています。かつては不可能だと思っていた、農薬や化学肥料で傷ついた土や生態系を癒やすことができました。今も多くの自然栽培やオーガニックの生産者は、このような助けを必要としています。環境や健康に負担をかける食べ物の責任は、作り手だけでなく、それを選ぶ私たち消費者にもあります。だからこそ私たちは、自然栽培やオーガニックの生産者を支え、地球環境を癒やし、自分たちの健康のためにも、自然な食べ物を選ぶ必要があるのです。



ロッドさんの思いと祈りに応えた鈴なりのリンゴたち

講演者

バーバラ・ハチプカ・バンダ



バーバラ・ハチプカ・バンダ

NADPZ(ザンビア自然農法開発計画)発起人・代表。2004年に広島で開催された、パン・アジア・ユースリーダーシップ・サミット(国連開発計画(UNDP)主催、Shumei共催)にザンビア青年代表として参加。Shumeiと出会い、2005年からザンビア南部の農村で女性組合での自然農法実施を主導している。プロジェクト20周年の昨年の時点では、およそ1万6千人の女性農民が自然農法のトレーニングを受け、自然農法はザンビア各地に広がりつつある。

ザンビア 伝統の智慧と自然農法の重要性

私は若い頃、「世界を変えたい」と強く願い、国連のミレニアム開発目標会議にも参加し、若者として最前線に立って発言していました。理想を語り、議論を重ねる日々の中で、次第に私はこう感じるようになりました。「会議で語るだけ

では足りない。自分の足で現場に立ち、行動しなければならない」と。

私は、政治家の父と献身的な母のもと、大家族で育ちました。私たちにとって週末の教会とは、礼拝堂ではなく農

場でした。トラクターに乗り、土に触れ、作物を育てることが日常だったのです。父は農業を心から愛し、土を耕すことを人生最大の喜びだと信じていました。その大地を愛する精神と、社会に責任をもって関わろうとする姿勢の両方が、私の中に自然と受け継がれていきました。

Shumeiと出会ったのは20年前、若くして母を亡くした直後の、人生の中でも特に困難な時期でした。母は亡くなる直前、約2000人の女性農民を集め、女性農民組合を立ち上げていました。女性が社会的に認められにくいアフリカの状況の中で、「女性こそが国の発展に参加しなければならない」と、母は強く信じていたのです。その母の遺志を受け継ぐように、私はShumeiと出会いました。それは偶然ではなく、静かに導かれた出会いだったと、今も感じています。

私はShumeiをザンビアに招き、母の遺産でもある女性農民たちと引き合わせました。当時のアフリカでは、開発の名のもとにアグリビジネスが急速に参入し、農薬や化学肥料を使えば「短期間で劇的に収量が増える」と繰り返し宣伝されていました。しかしその裏で、土は痩せ、在来種は失われ、農民の暮らしや誇りは、目に見えないところで少しずつ壊れていきました。

自然農法を知ったとき、私は子どもの頃に父の農場で過ごした記憶を、鮮明に思い出しました。土の匂い、作物に触れた感覚、そして大地や伝統文化との深いつながりです。短期的な生産性だけを追い求めるアグリビジネスとは異なる、自然の力を信じ、命をつないでいく生き方を、私はすでに知っていました。だからこそShumeiは、忘れかけていた原点を思い出させてくれる存在であり、私にとって「神様からの贈り物」だったのです。

私たちは、自然農法の技術を教えるだけではありませんでした。女性たちがすでに持っている知識や力、土地と共に生きてきた経験こそが、自立のために十分であることを、何度も丁寧に伝えてきました。多くの時間を対話に費やし、文化や精神性、伝統の智慧の価値を、女性たち自身が再発見できるようにしてきましたのです。

20年経った今、私たちは在来種の重要性を改めて訴えています。気候変動が進む中、在来種はその土地の環境に適應する力を持っています。しかし近年、農民の自家採種を禁止する法律が制定される国も現れました。2023年には史上最悪の干ばつにより、主食のメイズが60%失われました。農民が苦しむ中、政治家たちは自家採種を禁止する法律に署名しているのです。

ヨーロッパでは農業は一つの選択肢ですが、アフリカでは生きるための現実です。9割の人々が農村で暮らし、選余地はほとんどありません。だからこそ、アフリカ自身が解決策を見出さなければならないのです。

この20年間、私は何度も立ち止まり、「私は正しい道歩んでいるのだろうか」と自問してきました。忍耐し、涙しながらも歩みを止めなかったのは、現場で懸命に生きる女性たちの姿があったからです。

日本から1万キロ以上離れたアフリカの女性たち、イギリスや南アフリカ、そしてアイルランドの農家——地球に生きる私たちは皆、深くつながっています。しかし、私たちはその重要なつながりに気づかないまま、自然を破壊してきました。持続可能な未来のために、競争やエゴを手放し、互いを尊重し合い、愛をもって行動することが求められています。そして人類のつながりは、宗教や文化を超えた魂のレベルにあり、その魂は土に根ざしているのです。



プロジェクト発足当初のバーバラ・ハチブカ・バンドと
秀明インターナショナルのアラン・今井理事



2025年自然農法ショーで農民が種を展示する様子



メイズ



2025年自然農法ショー ステージ前で踊る農民の女性たち

講演者

今橋 伸也



今橋 伸也

秀明自然農法実施者。
イギリスの農場で19年間自然農法を実施したのち、日本に帰国。自身の畑で自然農法を続けながら、YouTubeや講演会を通して自然農法の普及に取り組んでいる。
現在のYouTubeチャンネル登録者数は5万7千人を超える。
全国各地で自然農法ラーニングプログラムを実施。

感謝と愛情に自然は必ず応えてくれる

秀明自然農法を実践して、今年で23年になります。19年間イギリスで自然農法を行い、2ヘクタールの土地で40種類以上の野菜を育ててきました。土の力だけで、多様な作物が育ちます。帰国後、約20年ぶりに日本で自然農法を再開しました。日本は土も気候も、イギリスとはまったく異なります。しかし、自然農法の基本原則である「自然順応・自然尊重」は変わりません。だからこそ、土とのコミュニケーションがとても重要になります。

初めて新しい畑を見たとき、その土は長年、肥料と農薬を投入され、深く悲しんでいるように感じました。「この土地では何も育たない」と、多くの人がすでに諦めていました。さらに、タヌキやイノシシによる獣害、山からの水による冠水被害も重なり、条件は非常に厳しいものでした。「なぜ、そんな難しい畑を借りるのか。もっと良い畑を探すべきだ」

そう言われるのも当然だと思います。けれど、このような厳しい条件でも野菜が育つことを示せたなら、自然農法の未来に希望の光を灯せると、私は信じました。だから、この土地を選びました。最初にしたことは、土を耕すことではありません。土と動物に語りかけることでした。

「こんにちは、土さん。私は今橋伸也です。ここで自然農法を始めます。肥料も農薬も使いません。種採りも頑張ります。心を込めて取り組みます。どうか、自然の力を貸してください」

次に、山に向かって動物たちにも声をかけました。「こんにちは、動物さん。私は伸也です。ここで自然農法を始めます。自然農法で育った野菜は人を健康にし、地球環境にも優しいです。私はこの理念を多くの人に伝えていきます。環境が良くなることは、あなたたちにとっても良いことです。できれば、野菜を食べるのは控えてください。ありがとうございます」

そして私は、毎日仕事を始める前に手を合わせ、祈り続けました。

「土さん、ありがとう。野菜さん、太陽さん、水さん、動物さん、

病気さん、虫さん、ありがとう。感謝します。今日もよろしくお願いします」

そうしていると、驚くような出来事が次々と起こりました。「ここでは何も育たない」と言われていた畑で、野菜が育ち始めたのです。

「キュウリは植えてはいけない。ジャコウネコが必ず食べる」と言われましたが、キュウリは豊作で、動物に食べられることは一度もありませんでした。

イノシシは三度、畑に現れましたが、草を踏むだけで野菜畑は避けて通りました。

あるとき、大雨で畑が1週間水浸しになりました。サツマイモ、ナス、トウガラシが植わっていましたが、プロの農家から「サツマイモは全滅する」と言われたにもかかわらず、全て元気に育ち続けました。

この過程をYouTubeで発信すると、「こんな状況で野菜が育つなんて信じられない」「希望をもらった」と、多くの声が寄せられました。

最初に土地の整備を手伝ってくれた女性は、「土が信じられないほど固く、掘るのも大変だった」と言っていました。2ヵ月後、再び訪れた彼女は、柔らかくなった土に触れ、「私は奇跡を見ているのでしょうか?」と驚いていました。その後、私は全国で自然農法の授業を行うため、夏に1週間ほど畑を留守にしました。気温が35度を超える中、通常なら雑草が一気に伸びる時期です。留守中も、私は毎日畑のことを思い、感謝の気持ちを送り続けました。戻って畑を見たとき、雑草はほとんど生えていませんでした。しかも、驚くほど柔らかく、数時間で畑全体の除草を終えることができました。まるで、雑草が私の状況を理解し、助けてくれているように感じました。

大地に愛情をもって接し、大地とコミュニケーションを取り、調和のとれた心を保つ。そうすれば、自然は必ず応えてくれます。

『すべては自然が教えている』



2026 ORFC Q&A

Q1. ザンビアには秀明自然農法を実践している農家が5000軒あるそうですが、その経緯をもう少し詳しく聞きたいです。

A. バーバラ：2004年11月にShumeiがザンビアを訪れ、8つの農民組合を回ったことが始まりです。当初、自然農法に関心を示したのは主に女性農民でした。木の下で会合を開いた際、端に座っていた首長や夫たちは「うまくいかないだろう」と言っていました。

しかし、会合を重ね、種を集め、女性たちが作物を育て始めると、干ばつの中でも成果が見え始めました。ザンビアの農業は雨に依存しているため、その変化はとても大きな意味を持ちました。2004年以降、農民の数は徐々に、しかし確実に増え、最終的に約5000人に達しました。現在では、南部だけでなく東部や西部でも、少なくとも10000人以上の農家に自然農法を教えています。

2023年は極端な干ばつにより、多くの農家が在来種の種を失いましたが、灌漑設備を持つ東部の農民が種を守り、小さなシードバンクを維持することができました。私たちの活動は2000人から始まり、20年で少なくとも16000人に影響を与えるまでに広がりました。現在では、何千人もの女性が自然農法を実践しています。

毎年8月には「自然農法ショー」を開催しています。収穫を祝うだけでなく、自然農法の成果や慣行農法との違いを地域

の人々に伝える場です。2006年から続けてきたこの取り組みが、女性農家の増加と誇り（オーナーシップ）を育む上で重要な役割を果たしてきました。農民組合として都市部に販売の仕組みも整えましたが、主体はあくまで農村の人々です。だからこそ、20年以上プロジェクトが続いているのです。

Q2. 私は30年ほど有機農業を続けていますが、長い間、土に何も入れずに作物を育てられる理由が分かりません。

A. 今橋：私たちは、土は本来、野菜を育てるために完全な存在だと考えています。岡田茂吉師が言われたように、「土は生きている」のです。私自身、耕している最中に、土のエネルギーが身体と魂に伝わり、「うれしい」と感じた体験があります。それ以来、土とつながりを深め、話しかけるようになりました。私にとって最も大切なのは、土と良い関係を築くことです。土が私を信頼してくれれば、私も土を信頼できます。その関係の中で、野菜は育っていきます。

A. アリス：秀明自然農法で大切なのは、まさに土を信頼することです。岡田茂吉師が示したように、土には作物を育てるために必要なものが全て含まれています。ただし、長年化学肥料を使ってきた土は、回復に時間がかかる場合もあります。その場合は、土を信じ、時間を与えることが大切です。まずは畑の一部から始めてみてください。土の力は少しずつ広がり、植物は深く根を張り、驚くような成果を見せてくれます。

プレイベント

Listening to the Land Day — 大地の声を聴く日



LTTLの会場となったウェスリー・メモリアル教会

ORFC 前日に行われたこのプレイベントは、自然と人とのつながりを見つめ直し、自然から学ぶことで、環境的・社会的課題の解決を目指す試みです。自然からのメッセージに耳を傾け、恵みや智恵に感謝し、変化へとつなげるための対話が行われました。Shumeiはイベントパートナーとして参加し、三つの会場で、思いやりと感謝の心、自然から学ぶ生き方をテーマに多様なプログラムを展開。太鼓演奏を通して自然のエネルギーを表現し、参加者が音を通して大地とつながる瞬間を作り上げました。また、ワークショップでは演奏とともに、その根底に流れる精神性と農業と芸術のつながりを紹介し、太鼓演奏の体験プログラムも行い、会場全体は和気あいあいとして笑顔にあふれていました。今年のLTTLでは、「精神性」や「生き方」が食と農業の分野ですます重要であることが示され、クロージングではサティシュ・クマール氏が秀明自然農法における「美」の重要性を語りました。自然への感謝と思いやりの心が調和し、平和へとつながることを実感する1日となりました。



昨年の3倍以上の参加者で、会場は2階も含めほぼ満席となった



自然から学ぶ様々なセッションが行われた

太鼓パフォーマンス

精神性・農業・芸術 — 太鼓を通して一つとなる 秀明太鼓 — 「祈りの太鼓」



LTTLでのオープニング演奏



秀明太鼓メンバーに教わりながら、参加者も一緒に太鼓を叩く様子



秀明太鼓
ホームページ

秀明太鼓は「祈りの太鼓」です。祈りと精神性を込めた太鼓の音は、人と自然を結び、会場全体へと広がっていきます。自然の音や四季、自然に宿る神々へ捧げるその響きは、日本の精神性を体現する芸術です。

太鼓を通して世界平和に貢献することを使命とし、南アフリカでの万国宗教会議やニューヨークの国連本部で行われたミレニアム世界平和サミットなど、国内外で演奏の機会を重ねてきました。

純粹で美しい心と祈りは大地に通じ、私たちの心・体・魂を満たします。自然と響き合う太鼓の音は、心を耕し、私たちの生き方や社会に「美」をもたらしていくのです。

太鼓ワークショップの感想

- 素晴らしかったです。とても力強く、エネルギーにあふれていました。私たちが太鼓を演奏しているときは、自分自身がなくなり、その瞬間以外には何もないように感じました。
- 私はベルギーの農家で、太鼓の音を聞くのは初めてでした。本当に素晴らしく、身体の奥深くで音を感じました。彼らにとって、自然や大地のために祈ることは非常に重要なのだと分かりました。



会議全体を振り返って

今回のORFCでは、Shumeiの三つの柱である「秀明自然農法」「美による感化」「精神性」が全て紹介されました。それらに共通する哲学は、「美」の重要性です。自然の力で育った美しい作物は私たちの身体を癒やし、自然や芸術、美しい心に触れることで、魂も癒やされます。

オープニングの秀明太鼓の演奏では、会場全体が一つとなり、会議の象徴的な幕開けとなりました。「土と携わる人々の視点一人と地球を癒やす道筋」のセッションでは、登壇者一人ひとりが農業を通じた精神性の実践や、秀明自然農法との出会いによる人生の変化を語りました。

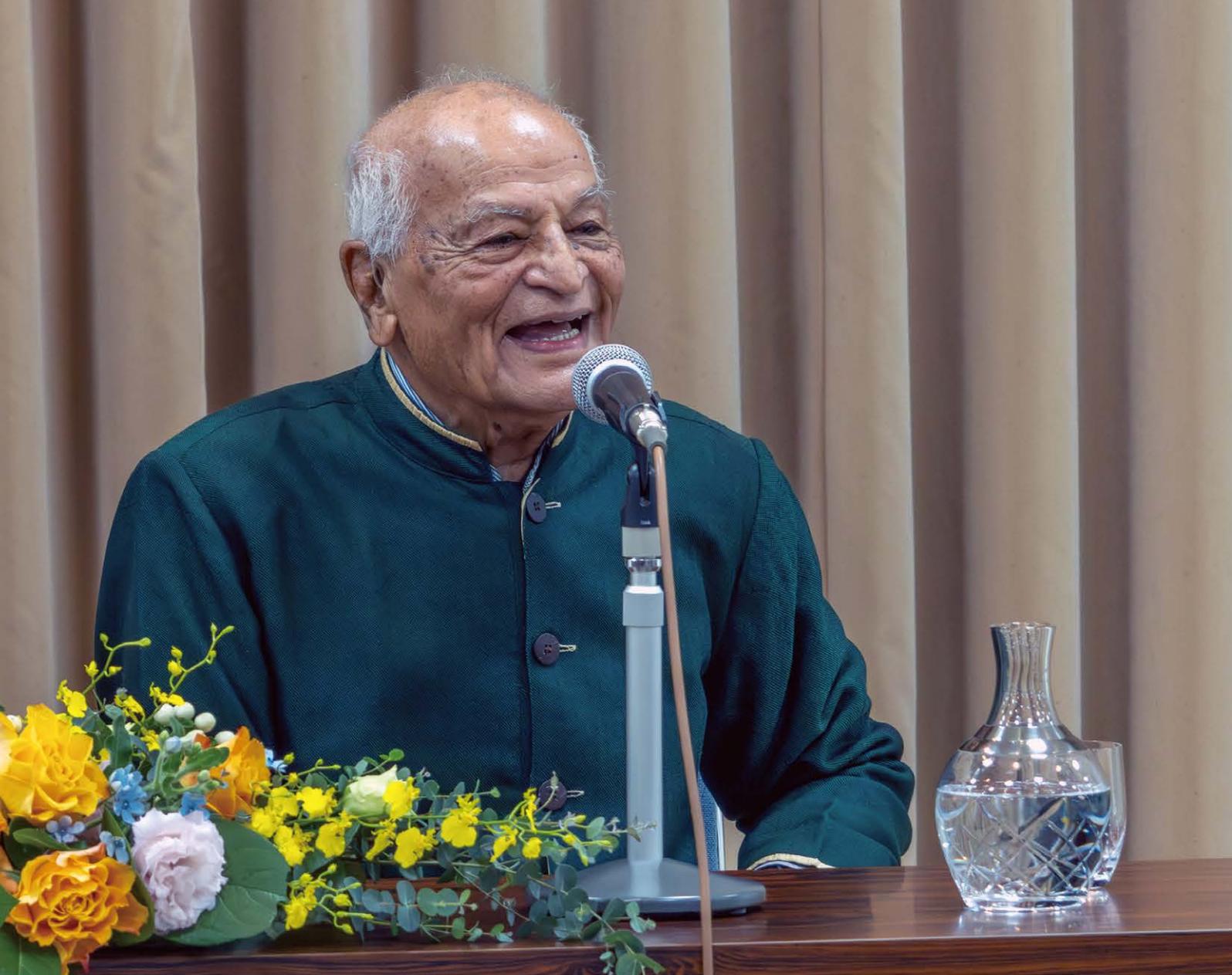
大地のエネルギーとつながり、自然の力を信じるのが、人の心を変え、コミュニティーを変え、その変化がやがて地

球全体へと広がっていく —。この3日間は、その道筋を示してくれる貴重な時間となりました。

私たち一人ひとりが美しい心を持ち、それを行動に移し、地球の未来を共に築いていきましょう。



たくさんの方々が今年もShumeiのブースを訪れ、自然農法や精神性に興味を持たれた



サティシュ・クマール氏講演

Lecture by Mr. Satish Kumar

サティシュ・クマール

イギリスの思想家。9歳で出家しジャイナ教の修行僧となる。18歳のとき遠俗。マハトマ・ガンディーの非暴力と自立の思想に共鳴し、核大国の首脳に核兵器の放棄を説く1万4千キロの平和巡礼を行う。イギリス南西部にスモール・スクールとシューマッハ・カレッジを創設。『リサージェンス&エコロジカル』誌 名誉編集長

このたび、イギリスの思想家 サティシュ・クマール氏が来日され、Shumeiにて講演会が開催されました。世界平和と愛の重要性、そして日々の暮らしの中にあるスピリチュアリティや「美」について語られた、魂のこもったメッセージの一部をご紹介します。

サティシュ氏の歩み

私はもともとジャイナ教の僧侶でした。ジャイナ教では、他者に仕え、人々のために働くことを大切にします。人のために尽くすことによって、私たちは悟りに至ると考えられています。そのため私は、スピリチュアリティとは、誰かのために、地球のために、植物のために、そして自然のために尽くすことだと捉えています。

しかし、ジャイナ教の僧侶として修行していた頃の私は、閉ざされた空間の中でスピリチュアリティを実践していました。ある日、ガンディーが夢に現れ、私にこう語りかけてきたの

です。「スピリチュアリティとは、閉ざされた場所で行うものではなく、世界や社会の中で実践されるものだ」——その言葉は、私の心を大きく揺さぶりました。けれども、ジャイナ教では一度僧侶になると一生僧侶でいなければならず、寺院を出ることは許されていません。それでも私は外の世界へ出たいと強く思い、ある夜、皆が眠っている間に寺院から逃げ出しました。

その後、私はバートランド・ラッセルという、原子力や核兵器に反対する運動を続けていた人物が投獄されたことを知りました。当時、彼はすでに90歳でした。90歳になってもなお、世界平和のために投獄される覚悟で行動し続けるその姿に、私は深い感銘を受けました。その出来事をきっかけに、私は友人と共に世界を歩くことを決意しました。世界平和を願い、一切お金を持たずにインドのニューデリーを出発し、モスクワ、パリ、ロンドンを経て、最終的にはアメリカのワシントンD.C.まで歩きました。イスラム教の国では、「あなたたちはイスラム教徒ですね。私たちはイスラム教を愛しています」と言いました。当時のソビエト連邦では、「あなたたちは共産主義ですね。私たちは共産主義も愛しています」と言いました。さらにヨーロッパやアメリカでは「あなたたちは資本主義ですね。私たちは資本主義の人々も愛しています」と言いました。その後、日本に渡り、東京から広島までの道のりを45日間かけて歩きました。日本では、「あなたたちは仏教徒ですか。私は仏教も愛しています」と言いました。

愛することに条件はありません。「良い人だから愛する」「自分の役に立つ人だから愛する」——それは本当の愛ではありません。たとえ自分にとって都合の良い人であっても、その人を愛すること。それこそが、本当の愛だと私は思います。だからこそ、世界平和のために歩いたこの旅は、私自身のスピリチュアルな活動であると思っています。

真・善・美は三位一体

スピリチュアリティは、日々の私たちの生活の中に存在し、愛情と奉仕の精神によってこそ実践されるものです。私は、「美」こそがスピリチュアリティを語る上で最も重要な要素だと考えています。Shumeiにも「真・善・美」という言葉がありますが、真と善が交わって初めて、美は生まれます。真や善を伴わない行動や、人のためにならないこと、正しさから外れた行いは、決して美しいものではありません。「真・善・美」は切り離すことのできない三位一体なのです。

人は、霊的な側面と体的な側面、その両方があって初め

て一つの存在となります。体的なものを変えるためには、まず精神的なものを変えなければなりません。

自分自身が変化を起こさない限り、社会を変えることはできないのです。しかし、自分が変わり、周囲に変化をもたらすことができれば、世界は必ず美しいものになるはずで

す。私がシューマツハ・カレッジを設立したのは、この社会に美しいものを送り出し、美しい行動を生み出していく——そのためのクリエイティビティを学んでもらいたいと考えたからです。シューマツハ・カレッジでは、教室で授業を受けるだけではなく、掃除や料理、ガーデニングといった日々の営みを通して、「美しい活動」とは何かを学びます。今、世界は環境的にも経済的にも、さまざまな問題を抱えています。大量生産のシステムによって生み出されているものの中には、残念ながら美が感じられないものも多くあります。美しくないものをつくり続けた結果が、環境問題や公害です。私たちの身の回りにある多くのものが美しさを失ってしまったのは、「美しいものを生み出そうとする心」が欠けているからだと思います。

小さな種から、未来の森へ

今、私たちに最も必要なのは、新しい文明社会です。その文明とは、海や空、大地といった地球上の自然を破壊し、汚すものではなく、それらを美しく保ち、調和を育む文明でなければなりません。その文明を築いていくことが、今、最も大切なことだと私は考えています。

どんな大きな木も、最初は小さな一粒の種です。小さなどんぐりが大きな樫の木へと育つまでには、何十年もかかるかもしれませんが、必ず大きく育ちます。一本の大きな木が育てば、そこからまた多くのどんぐりが生まれ、命の輪は広がっていきます。私たちは、その営みを自然から学ばなければいけません。小さな種が大きな木となり、その木が再び新しい種を生み出す——この循環を繰り返していくことが、何よりも大切なのです。それが、私たちが今取り組むべき活動なのだと思います。また、種が大きな木に育つためには、人の心や優しさ、太陽の光や水といった周囲との関わりが欠かせません。木がひとりだけで大きくなることはありません。相互のつながりがあってこそ、成長は可能になるのです。やがて木々から新しい芽が生まれ、それが次々と広がっていけば、大きな森ができるでしょう。皆さん一人ひとりがその小さなどんぐりです。どんぐりが大きな木へと育っていくように、どうか自分自身の成長を信じ、歩み続けてほしいと思います。

質疑応答



Q. 価値観の違う人に、愛を持って接するにはどうしたらいいのでしょうか。

A. 世界中の誰とでも共有できるものが愛です。自然を愛し、人を愛し、美を愛する。愛を育むことに焦点を置くことが一番良いと思います。価値観を押し付け合うのではなく、愛という価値観を共有し、お互いに愛し合うべきだと思います。そしてもう一つは美です。どんな人も美には心を動かされます。違いを探すのではなく共通点を見だし、私たちを分裂させるものではなく融合させるものに目を向けることこそが教育であり、哲学です。現在の教育は違いに目を向けがちですが、闘争や敵対心を選択するか、友情、平和を選択するかはあなた次第です。

Q. 私は将来、保育士になりたいです。子どもへの良い教育方針について教えてください。

A. 子どもたちにはそれぞれの人生、運命があります。ぜひ自由に失敗させてあげてください。失敗しないようにしてしまいがちですが、私たちは失敗から学びます。だからこそ、自由に失敗し、そこから学べるようサポートしてあげてほしいと思います。また、作物を育てるように子どもたちに接してあげてください。作物を育てるとき、こう伸びろ、こう芽を出せなど細かくコントロールしようとはしないはずですが。柿になる子もいれば、リンゴになる子もいます。何になるかはその子の人生です。こうあるべきという観念を捨て、その子に合った人生が伸びるように支えてあげてください。

Q. AI技術の発展について、サティシユさんの見解をお聞かせください。

A. AI はあくまでツールであり、私たちの知性や理性、魂や心を置き換えることはできません。AI をペンに

例えるなら、本を書いているのはペンではなく私たちです。智恵や発想は人間が持っているもので、あくまでも私たちがマスターでなければいけません。ペンに使われるのではなく、ペンをツールとして使うことが大切で、そのためには人間としての知性やスピリチュアリティをしっかりと育む必要があります。テクノロジーが発展することは悪いことだとは思いませんが、使いこなせないのであれば、AI は使わない方がいいと思います。テクノロジーは急速に進化していますが、私たち自身の知恵や心の成長は遅れています。だからこそ、精神文化の向上が必要だと思います。

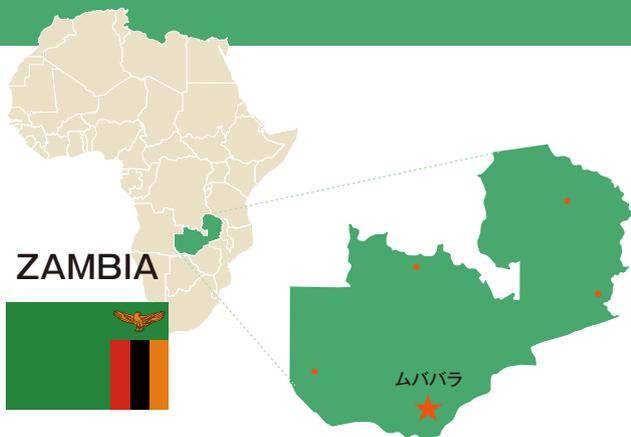
Q. 若い世代に期待していることはありますか。

A. 内なる強さを育み、勇気を持つことを学んでほしいです。若い人を見ると、学校を卒業した後に、「無事に就職できるだろうか」「夢を実現できるだろうか」といった不安を抱え、行動を起こすまで踏み出せない人が多いように感じます。ぜひ若い人にはもっと自信を持ってもらいたい。皆さんは素晴らしいものを持ち、秘められた可能性がたくさんあります。自分の可能性に気づいてください。皆さんが思いを持って、どんな人にでもなることはできます。その可能性を開花させるためにも、目の前の小さな安心だけを求めるのではなく、自分に何ができるかを考えてほしいと思います。自分の身の回りのことばかり案じている間は、不安はどんどん増えていきます。でも、「私は社会のために貢献するのだ」という大きな目標を持って、必ずそれは素晴らしいことにつながるはずです。勇気というのは、頭で考える勇気ではなく、自分の内と魂から来る勇気です。若い皆さんには内なる勇気というものを育んでほしいと思います。



ザンビア自然農法ショー 20th Anniversary

2025.8.21~23



アラン・今井理事 (左)、バーバラ・ハチブカ・バンダ (右)

2025年8月21日から23日までの3日間、ザンビアのムババラ地区で第20回自然農法ショーが開催されました。アラン・今井と共に日本と香港から31名の青年が参加し、現地の方々と交流しました。今年で20周年を迎えたザンビアプロジェクトでは、Shumeiへの理解が現地に広がり、より深い絆が生まれています。今回で3回目の参加となる青年たちは、Shumeiのフィロソフィーである三つの柱（自然農法、美による感化、スピリチュアリティ）を通して、多くの人々と文化と心を分かち合いました。当初は大人ばかりの参加でしたが、子どもたちの参加できるプログラムも増え、会場は笑顔と活気に包まれました。





自然農法ショー 20th Anniversary



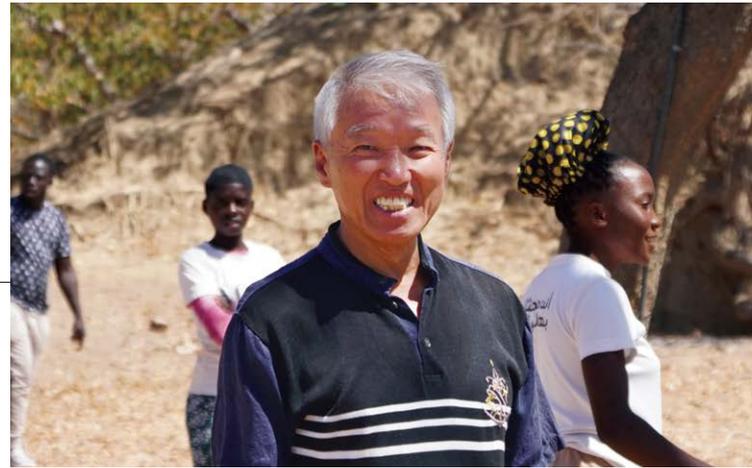
ザンビアプロジェクト 20周年を迎えて

秀明インターナショナル 開発途上国支援担当理事

アラン・今井

プロジェクトの歩み

2004年7月、Shumeiが国連のNGO資格を取得し、国連NGOとして最初に参加したイベントが、国連開発計画、女性世界平和会議（GPIW）との共催で9月に広島で行われたパン・アジア・ユースリーダーシップ・サミットでした。そこにバーバラがアフリカ南部地域の代表として参加し、彼女はShumeiが提供したオプションツアーの黄島（瀬戸内海に浮かぶ小島）で秀明自然農法と出会いました。彼女の母がザンビアの南部州にあるムババラ地区で女性農民組合を立ち上げ、その支援に当たっていましたが、残念なことに交通事故で亡くられたのです。ザンビアに帰ったバーバラを待っていたのは農民組合のリーダーたちでした。バーバラに母の遺志を引き継ぎ、女性農民たちを支援してほしいということだったのです。日本で出会った農薬や肥料に頼らない自然農法を思い出したバーバラは私に、「ザンビアに来て農民たちに自然農法を教えてもらえないか」とメールを送ってきました。2004年11月、私は初めてザンビアを訪問しました。2005年3月、干ばつに見舞われても元気に育っている在来種のメイズを見て、自然農法による支援の可能性を見だしました。同年、14トンの在来種メイズを集め、10月に1000件を超える農家にタネを配りました。それが始まりだったのです。初年度の雨季（11月～3月）は恵みの雨をいただき、初めて在来種タネを用いて無肥料・無農薬で育てたメイズの立派な収穫を得て、農民たちは大きな励まし、勇気、確信を得ました。あれから20年、在来種の自家採種は確実に農民たちの中に浸透し、4～5年に一度やってくる干ばつの中でもタネを維持してきました。



自然農法ショーによる地域の発展と 日本青年との交流

乾季の7月あるいは8月には、女性農民とその家族が集まり、収穫した自然農法作物を持ち寄って、収穫祭の意味を込めて自然農法ショーが行われています。自然農法種子や工芸品の展示、サッカーやネットボール、歌やダンスなどで大いに盛り上がっています。この自然農法ショーを機に、女性農民だけでなくその夫や多くの若者たちにも活動を理解してもらえるようになり、持続可能な地域開発を牽引するモデルとして認識されるようになってきました。2015年と2018年には日本から青年たちが自然農法ショーに参加し、自然農法の基になるShumeiのフィロソフィーを伝え、Shumeiの存在感という大きなインパクトを農民たちに与えてくれました。今年の20周年には日本と香港から31名の青年たちが参加し、太鼓、スポーツ、歌とダンス、日本文化紹介ブース、日本食のおむすびの提供など、現地の農民たち、子どもたちと一体となって、大きなエネルギーを生み出してくれました。青年たちはホームステイ先で受けた物質的には限りのある中でも心ある温かいおもてなしを受けて、感動と感謝を頂き、一生残る思い出を作ることができました。



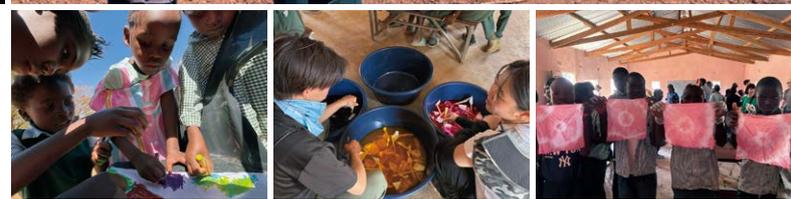


ペンバ地区小学校 10th



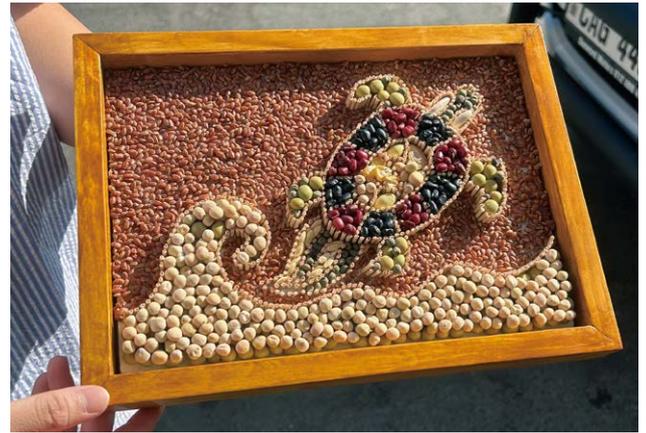
ペンバとムババラの教育支援の現状

ムババラに続いて自然農法を始めたペンバ地区で2015年に開校した小学校は既に卒業生を出し、現在247名の子どもたちと8名の教師から成る学校になっています。英語を全く話せない子どもたちが、上級生になると心臓の構造と血液の流れを黒板に描き、インターネット社会の中で自身を守る心構えなどを勉強しているのを見ると、感動します。ムババラのプロジェクトサイトに青年に向けて開校した職業訓練校では、縫製と家具製作を指導し、農業だけで他の収入源を見いだせない田舎のコミュニティーにあって、若者たちに大きな夢を与えています。卒業生は南部州の州都チョマにある職業訓練校との提携で正式な政府発行の卒業証明書を得られるようになり、2024年初めて卒業式が行われました。





自然農法ショー参加者全員で作成した手形アート



ザンビアの方にプレゼントした種アート

アフリカ全土への展開を目指して

23歳で日本に来たバーバラは結婚し、夫サイモンのおおらかな理解とサポートを得、長男ジェージェーは日本・香港の青年たちと一緒に今回自然農法ショーに臨み、長女ジェシーは将来のバーバラを思い起こさせるような、15歳にしてプロジェクトを引っ張っていく意気込みを見せていました。バーバラは自然農法による支援活動を通してShumeiのフィロソフィーに触れ、今はそれが彼女の生き方となって、Shumeiの青年を迎え入れてくれました。私はザンビアプロジェクトをモデルに、さらにアフリカ全土の開発支援に臨んでいきたいと思っています。



バーバラの長男 ジェージェー



長女 ジェシー



ザンビア研修に 参加した青年の感想

2025年8月16日～27日までアラン・今井と共に31名の青年が研修に参加しました。

農民の人々は大自然に生かされていることを全身で感じ、一生懸命に生きていました。特に女性たちは本当に力強くおおらかで、喜びを素直に表現します。彼女たちの姿や笑顔の輝きから、プロジェクトを自分のものとして誇りに思い、責任を持って作り上げていっていることが伝わってきました。農民の方のお宅にホームステイしたときは、満天の星空の下で火を焚き、自分たちが育てた自然農法の食材を使って夕食を準備してくださいました。大自然の恵みを感謝で頂き、家族とのつながりを大切に生きていくことには、どんなお金でも買えない豊かさがあります。それが人間として生きることそのものだと、彼らの生き方から気付かされました。今回の研修で、自然農法によってザンビアの人々の人生が変わっていることを実際に見て、ザンビアの人々の純粋な心と雄大な自然の美しさに感動し、この素晴らしい地球に生きている感謝を深く心に刻みました。(M.I.)



ザンビア研修を通して、私は「幸せ」について深く考えるようになりました。日本での生活では、便利さや物の豊かさが幸せにつながると思いがちでした。しかし、現地での暮らしを目にしたとき、必ずしもそうではないと気付きました。大切なのは、何を持っているかではなく、今あるものを幸せだと思える心だと感じました。

また、人と関わる中で特に印象に残っているのは、言葉が通じなくても伝わる心の温かさです。現地の人と視線を交わし、自然に笑みが返ってきたとき、言葉以上に大切なものがあると実感しました。その瞬間、国や文化の違いを超えて人はつながれるのだと思い、胸が熱くなりました。

今回の体験を通じて、幸せは誰かから与えられるもので

はなく、自分の心の持ち方次第で生まれるのだと学びました。アフリカで感じた気付きや感動を忘れずに、これからの生活の中でも、身近な幸せを見つけて大切にしていきたいです。(Y.K.)



「日本は物質的に恵まれているけれど、自分たちが何を失っているのかを考えてほしい。精神的なことが失われないようにするにはどうしたらいいのかを考える必要がある」というアラン・今井の言葉が心に残り、考えるきっかけを頂きました。ホームステイの際、みんなが水や鍋を運んだりして、みんなで火を囲んで食事を作っていました。真っ暗で、ほとんど声だけでしたが、一つのことをみんなですること、家族のつながりが強くなるのだと感じました。日本では、個々でスマートフォンを見る時間が増え、家族とのつながりが薄くなっていると感じます。個人の時間は必要最低限にして、身の回りにいる家族や周りの人との関わりを大切にしたいと思いました。

ザンビアでは仕事がなくとも、家族や周りの人々とのつながりを持ち、充足感があるように感じました。自分に置き換えたときに、今仕事ができること、衣食住において何不自由ない環境に感謝することが非常に大切なのだと考えることができました。精神的なものを失わないように、何があれとか、ないとかではなく、今あるものに幸せを感じて過ごしていきたいと思いました。(T.S.)



今後のザンビアプロジェクトに向けて

NADPZ (ザンビア自然農法開発計画) 代表

バーバラ・ハチプカ・バンダ

20年の歩みと広がるつながり

20年という歳月が、これほど早く過ぎ去ったことに心から驚かされます。私が初めてザンビアプロジェクトを始めたとき、私はまだ20代前半で、エネルギーやアイデア、好奇心に満ちていました。そして今、20年が経ち、40代となり、妻であり母となりました。この年月で私自身が成長し変化してきたように、このプロジェクトやその目的に対する私の見方もまた変わってきました。

2025年8月、私は日本と香港から来たShumeiの若者たちを迎え、ザンビアプロジェクト20周年という大きな節目を共に祝いました。しかしこの訪問は単なる記念ではなく、文化・価値観・希望の交流の場でもありました。若者たちは地元農家と出会い、その物語を聞き、ザンビアの文化の豊かさを直接体験しました。彼らの喜びや感動を目の当たりにし、この運動の種がザンビアの国境を越えて広がっていることを実感できたことは、とても励みになりました。



自然農法の未来を担う若者たちのために

しかし、過去を振り返ると同時に、未来にも目を向けなければなりません。ザンビアプロジェクトのこれからはどうあるべきでしょうか。その答えは、最近開催された第20回自然農法ショーにおいて明らかになりました。農村地域に集まった圧倒的な数の若者たちの姿が、“この活動の次の段階は「農村の若者との関わり」に焦点を当てるべきであること”を示していました。彼らはこの地域の大多数を占めるだけでなく、ザンビアの農業の未来そのものを担っているのです。

このプロジェクトを立ち上げた女性たちは今や50代、60代、80代に至っています。しかしその子どもたちは農業を続けていません。これは非常に深刻な課題です。今後2年間、NADPZは自然農法を若者にとってより魅力的なものにするための戦略を構築しなければなりません。小規模農業の持続可能性、そしてザンビアの農村の食料安全保障の未来は、この取り組みにかかっています。





酒井賢治（左）、ピクトリアさん（右）

タンザニア さくら女子中学校 自然農法プロジェクト

秀明自然農法ネットワーク 酒井 賢治

タンザニアでの秀明自然農法の歩み

6年ぶりにタンザニアさくら女子中学校を訪問し、4回目となる自然農法支援を行いました。この学校は2016年に開校しました。慶應義塾大学名誉教授の（故）岩男寿美子先生を中心に創立され、キリマンジャロの会が運営する全寮制の女子中学校です。アフリカでは、女性が十分な教育を受けられないことが貧困の一因とされており、この学校は女性リーダーの育成を通じて、女性の社会進出を支える重要な役割を担っています。

生徒たちに安心・安全な食事を提供したいという、キリマンジャロの会の思いから、開校当初より自然農法支援が

始まりました。生徒数は33名から約200名へと増え、2016年に学校前の広場には圃場を整備し、休憩スペースや鶏舎も設けています。圃場にはバナナの苗木を植え、成長とともに森のような日陰が生まれ、その環境を活かして野菜の栽培が可能となり、現在では副食として野菜を自給できるようになりました。一方、主食であるメイズ（トウモロコシ）を安定して自給するには、より大規模な圃場での栽培が必要です。農薬や化学肥料の使用を前提としたF1種（ハイブリッド）が主流となる中、この学校では自然農法による主食の生産にも取り組んでいます。



学校の圃場（2018年）



メイズ



自然農法の授業



ザンビア農民の支援

ザンビア農民からの支援と自家採種

自然農法には在来種のタネが欠かせません。タンザニアの隣の国ザンビアでは2005年から自然農法支援が始まり、多くの農家の方々が自然農法を実践して成功しています。そこで2018年、ザンビアの農民の方々がメイズの在来種のタネをタンザニアまで届け、生徒たちにタネまきの指導を行いました。その後も自家採種を続けてきましたが、近年は異常気象により栽培が困難な年もありました。それでも、当時の理事長フリーダさんは貴重なタネを守り続けてこられました。2024年8月にフリーダさんは病気で逝去されましたが、その志は妹である現理事長ビクトリアさんに引き継がれています。今年も受け継がれた自家採種のタネ20kgをまき、無事に育てることができました。

今回の訪問では、翌年の栽培に備え、5ヘクタール分のタネを確保するため、収穫作業を行いました。生徒たちの協力により、必要量150kgを大きく上回る240kgのタネを確保することができ、生徒約200名分の1年間の主食をまかなえる見通しが立ちました。

また、在校生の多くとは初対面であったため、全クラス対象に自然農法の勉強会を実施しました。学校の歩みや自然農法プロジェクトについて、映像を交えて紹介し、整備前の学校の様子や、圃場が少しずつ整っていく過程、先輩たちの活動が映し出されるたびに、生徒は驚きの声や、歓声が上がりました。

生徒たちは、自然農法の必要性や、開校当初から活動が継続されてきたこと、そしてザンビアの農民から受け継いだ貴重な在来種を自家採種によって守り続けてきたからこそ、今年も来年分のタネを十分に確保できたことを理解してくれました。農薬や化学肥料、F1種を使う農業が当たり前とされる中、人にも自然にも負担をかけない持続可能な農法を、実践を通して学べることは、生徒たちにとって大きな学びとなっています。

さくら女子中学校は、学業面でも優秀で、全国テストではアルーシャ地区約60校の中で5位以内に入る実績を誇っています。現在は高校の建設も進んでおり、2026年7月の開校が予定されています。自然農法の学びを通して、農業の大切さとともに心も育まれ、生徒たちが将来社会で活躍することを願っています。



メイズの収穫

新理事長ビクトリアさんからのメッセージ

「私は自然農法が好きです。在来種は力強く、害虫にも強いです。自然農法で育てたメイズで作るウガリや料理は、甘くておいしく、体にも良いと感じています。F1種は収量が多いため一般の農家では多く使われていますが、保存時に虫がつきやすく防虫剤が必要になります。一方、自然農法の在来種は保存しても害虫の被害を受けにくいのが特徴です。現在、タンザニアで在来種を使う人は少なくなっていますが、本校では在来種を守りながら、持続可能な農業を実践しています。とても素晴らしいことです。私たちに自然農法を教えていただき、心から感謝しています」

ビクトリア理事長、そしてトーマス校長からも、自然農法による継続的な支援に対し、深い感謝の言葉が寄せられています。



生徒たちによるタネとり



メイズと豆の料理



240kgのメイズ（来年のタネ用）



NPO法人 秀明インターナショナル

〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代353-1

TEL:0748-82-3140 FAX:0748-82-3143

E-mail : info@nposhumei.or.jp

https : //www.nposhumei.or.jp



2026年3月1日発行